
ことばとプレイセラピー

乳幼児期のこころを育む心理臨床

黒川嘉子著

創元社, A5判168頁, 3,850円, 2025年3月刊

(西南学院大学) 細川美幸

読み始めてしばらくして、まず感じたことは、「この本の言葉たちには、実感がある」、であった。そして、点と点が線でつながっている、例えば体験と言葉が、情動と知が、専門用語と絵本のことばが、過去のレジェンドたちの叡智と現代のそれらが、さまざまにつながっていてなめらかである、と感じた。

特に、著者（以下、黒川氏）の事例を読んでいると、湿り気と呼吸と体温を感じる。「……指先の力は弱弱しいながらも、微妙なバランスを保って積んでいく。息づかいから、少しずつAが自分の目線より積み木の塔が高くなっていくことを楽しんでいるようにセラピストに伝わってくる。（中略）すると、Aは一瞬手をとめて、セラピストの声を聞き、その声を自分の身体の中に入れるかのような間を示す」……皆さんはこれらの言葉を読み、どう感じるだろうか。まるで二人の様子が見えるようでもあり、セラピストの呼吸や緊張感と同じ身体になり自分もそこにいるかのような感覚になる。岸本（2025）は、臨床のエビデンスについて、「まずエビデンスという言葉ですが、もともと、『見る』を表すvidereというラテン語に、『～の中へ』ということを表す接頭辞e（en）がついてできた言葉で、目に見えるようにする、という意味でした」と示し、「『見る』という状態『の中に』入る、ということで『見えるようにする』」と説明している。黒川氏の事例は、あちこちでまさに

「見るという状態の中に入る」感覚がある。

この本を読んでいると、私たち臨床家は何者か、という点について真摯に向き合いたくなる。私たちは「あいだ」の専門家である。意識と無意識、言葉とイメージ、確かさと不確かさ、自分と他者、現実と非現実、さまざまな「あいだ」を行き来する。黒川氏は、言葉にはそれら「あいだ」を橋渡しする働きがあるという。ときに私たちは、「あいだ」にしながら、セラピストとクライアントとの「あいだ」にとどまらず、心理臨床の過程で共に溶けて、渦になり、その渦からそれぞれに自己が生まれていく体験もすることがある。特にプレイセラピーやMSSM（山中，1984）のときは、黒川氏の言う「身体感覚を用いた関わり合い」を土台に生起しやすい。しかし近年、この点を、いわゆる心理士と言われる人たちのなかでどれほど共有できているだろうかと思うことがある。「ともに在る」ということを避け、何か障害や特性があれば、それに相応しいマニュアル的な会い方があると思込んでいる心理士に会う。しかし、この本を読むとわかる。クライアントと私を見ること、そしてそれをそのまま「ことば」で表すことでこそ、セラピーは始まるのだと。そして言葉を失うことがあっても逃げずにとどまること、言葉にならない声を含め「すべての身体感覚を動員して聞き、その音の中に身を置いてみること」「クライアントとの関係性に固有の『ことば』と、一般に共有可能な『言葉』の両方を話せるバイリンガルになる」ことなど、子どもと共に生きた臨床家の言葉には、随所に血が通っていた。心理臨床を目指す大学院生やスタートアップを支えるだけにとどまらず、その指導者らにも一読いただきたい本であった。

文 献

- 岸本寛史（2025）特集「臨床のエビデンスとは？」。一社）佐賀県公認心理士協会ニューズレター（<https://saga-acpp.jp/hpcms/wp-content/uploads/2025/03/cc8efb2723b8c3076d329df7e59e72bc.pdf> [2025年8月27日閲覧]）
- 山中康裕（1984）箱庭療法と絵画療法。（佐治守夫・福島章・越智浩二郎編）ノイローゼ—現代の精神病理 第2版。pp75-91、有斐閣。